

オルチン書簡をとおして見た神戸女学院と音楽

——創設期から音楽科設置（一九〇六年）頃まで——

手代木 俊一

日本の讃美歌史の上で、ジョージ オルチン師(Rev. George Allchin)は忘れることのできない存在である。^① 彼の死にあたってニューヨーク・タイムズは、「日本における教会音楽の父」^②と彼のことを報じている。オルチン師は、一八五二年イギリス、ケント州ブラムステッドに生まれ、一八七二年カナダに渡り、一八七七年アメリカに移住。一八八〇年バンガー神学校、一八八一年ウイリアム・カレッジ卒業。一八八二年アメリカン・ボード(The American Board of Commissioners for Foreign Missions、コングリゲーションナル教会が母体)の宣教師としてその年結婚したネリー・ストラットン(Nellie Stratton)と来日、三度の帰国をはさんで、一九二〇年迄伝道した。一九三五年ニューヨークで死去。ボストンの郊外メルローズのストラットン家の墓地に埋葬された。

オルチン師の伝道は大阪ステーションを中心としていたが、神戸女学院にも足跡を残し、オルチン文庫、オルチン・ロード、オルチン館とにその名をとどめている。ここで、神戸女学院創設期から音楽科設置（一九〇六年）の頃までのオルチン書簡をとおして、神戸女学院と音楽について触れ、音楽科設置にいたるまでのオルチン師の果たした役割

について検証して行きたい。

さてジョージ オルチン師はその書簡をとおして何を伝道会本部に伝えていたのであろうか。オルチン師の書簡には「音楽」「女学校」に関する記述が多く存在する。彼自身関心が高かった領域であったと考えられるが、オルチン師を日本に派遣した伝道会本部の期待でもあったと思われる。オルチン師が賜暇休暇でアメリカに帰国した際、伝道会本部書記N・G・クラーク博士(Dr. Nathaniel George Clark)は、マサチューセッツ州メルローズの彼のもとへ次の書簡(二八九一年十月八日付)を送っている。「親愛なるオルチン氏—略—我々は何本か短い講演をするよいチャンスだと考えております。—略—あなたはご自分で最初のテーマとして挙げた『日本の都市における教会』、都市に存在する教会がどのような天の配剤を求めているのか—略—をすべて述べることをできると思います。そして、次のスピーチのために『音楽』『女学校』はとって置いて下さい」。

オルチン師の書簡で音楽に関して具体的な記述は、日本における音楽教育現場とその必要性、そのための教員の要請、また、神戸女学院の音楽館、日本音楽の分析、音楽のお雇い外国人だったルーサー ホワイティング メーソン(Luther Whiting Mason)をアメリカン・ボードの一員として再来日させる必要性等である。そして前述のキーワード③「音楽」「女学校」の実現が神戸女学院の音楽館の建設、音楽科設置なのである。ここでは音楽科設置(一九〇六年)からオルチン師の来日まで遡りながら「オルチン書簡をとおして見た神戸女学院と音楽 創設期から音楽科設置の頃まで」に関して論述して行きたい。

ここで残念なことに、音楽科設置当時(一九〇六年頃)のオルチン書簡には神戸女学院と音楽に関する記述はまったく見られない。当時オルチン師は、神戸女学院最大最善の建築物「総務館兼大講堂(赤れんがの大講堂)」(一九〇七年落成)の諸工事監督一人のうちの一人であり、後述する一八九四年の音楽館の建設にも関わっていた。またこの年(一八

九四年)から声楽(唱歌)の授業を嘱託として神戸女学院から委託されていたので、神戸女学院と音楽に関する記述があると思われたが、見出せなかった。

音楽科設置当時の神戸女学院に関して書簡には、バートン博士(Dr. James L. Barton)とムーア博士(Dr. Moore)を新しい建物(総務館兼大講堂)に案内する予定であることや、工事監督であることが過重な労力を必要とし、疲労のため病気になってしまい療養所にしばらく入っていたことが書かれているだけである。^⑥

オルチン師は、神戸女学院の音楽館の建設が実現したことで、また声楽(唱歌)の授業を嘱託として神戸女学院から委託されていたことで、ある程度の役割は果たしたと考えていたのであろうか。彼はもともと大阪ステーションの宣教師であり、音楽科のスタッフに直接加わらなかったことによることも考えられる。そして当時の書簡の随所にあらわれ、彼の日本における教会音楽の最大の功績である『讃美歌』(一九〇三年)、『讃美歌 第二編』(一九一〇年)の編集にこの時期打ち込んでいたためとも思われる。

さて、神戸女学院は一九〇七年の総務館兼大講堂の建設の以前に理化学館と音楽館(一八九四)年を建設しており、この建築にもオルチン師は関わっていた。オルチン書簡には神戸女学院の音楽館に関して次のように書かれている。

比叡山

一八九〇年七月二十六日

N・G・クラーク博士

拝啓^⑧

ミッシェンのいろいろなメンバーからの手紙とともに年次総会の覚え書きをあなたにこの郵便で送ります。したが

って、あなたはわたしからの長い手紙を読まなくて済むでしょう。しかし、わたしが簡単に説明したいと思う四つの解決しなければならぬ問題があります。――略――

四つめ、神戸の女学校で音楽のためだけの建造物に関する予算の採択。この建物は伝道の場面において、生徒の音楽の能力を発揮するためにも、そしてすべての人の楽しみのためにも絶対に必要なものです。

英語の学習に対する願望が減る一方で、音楽に対する願望は増えています。どの牧師の妻も教会でオルガンを演奏しなければならぬと思っています。

どのバイブルウーマンも、もしオルガンが演奏できるのなら、より役に立つことができると思っています。そうなのです、誰もがオルガンのレッスンを求めています。幼稚園の先生がもしオルガンが演奏できなかったら、悲しむべき欠落ということになります。普通レベルの学校の授業で音楽を申し込む少女の数がすべての学年で増加しています。年長の少女で、大変音楽に秀で、音楽の助手になることを望んでいる者が何人もおられます。このような助手は、女性宣教師が全ての生徒を教えることができないので、必要なものなのです。それゆえ、特別に一年か二年の講習を牧師の妻、バイブルウーマン、助手、幼稚園の教師等に受けさせる場所として、女学校の一つにいくつかの建物が建てられるときが来たのです。建物には、たくさんの小さな部屋がなければなりません。そして十分な数のオルガンと一台か二台のピアノを備えているべきです。

神戸の女学校の通常の音楽教師に加えて、もう一人の教師がこの特別の学科のために要請されるでしょう。

このようにして、ミス ハウ (Miss Howe) はこの責任から解放されることが出来ます。ミス バロウズ (Miss Barrows) も、そしていろいろなステーションで牧師の妻などを教えているほかの人々も同様に解放されます。この場所が、何人かの人が特別な寄金をだしたくなる、伝道にとってもっとも有効な支部になると思えるのです。

様々の立場の人がこの新しい科目のためにオルガンの寄贈を望んでいます。わたしはこの件に関して後でもっと書きたいと思います。新しく用意した土地にどんな種類の建物を建てるとしても、とても危険なので、整地のための三〇〇ドルがすぐに必要です。神戸の学校用の土地は、どの建物を建てるにしても、斜面を削り、穴はふさがれなければならぬものばかりだと言っているでしょう。もし秋に削るのが終わるならば、新しい建物を建てる予定の次の春より前に、グラウンドは完成するでしょう。――略――

神戸の女学校とは後の神戸女学院のことである。^⑨ 学校用の土地の状態等具体的な様子が書かれているが、ここでオルチン師は音楽館建築の意義について、伝道、音楽教育、娯楽の面で重要であると述べており、特に牧師の妻とオルガン、バイブルウーマン、助手、幼稚園の教師とオルガンとの関係を強調している。また神戸の女学校に関してオルチン師は、一八九三年四月十五日付クラーク博士宛書簡で「神戸の女学校の土地は町で一番すばらしいところです。そして、もしここが条約港でなかったとしたら、私たちは数々の不満の声を聞くことになったでしょう。そのような場所が外国人によって所有されるという事実は、癪にさわる点です」と報告し、外国人としての気遣いをみせている。土地の状態、金銭面、人員に関して具体的な記述の見られるオルチン師の一八九〇年七月二十六日付書簡に対しボストンの伝道会本部は次の書簡をオルチン師に書き送っている。

親愛なるオルチン氏

――略――

一八九〇年八月二十日

私はあなたが神戸の女学校に関して、音楽のための建物について述べていることに注目しています。私はあなたの意見を書いた手紙の写しを一部、今すぐにW B M I^⑩に送るつもりです。というのは、その計画は順当に進んでいくと私は信じていますが、もしその計画が実行に移される際、W B M Iは、その資金の提供を期待できる伝道会だからです。――略――

N・G・クラーク

一八九四年五月十日

親愛なるオルチン氏

神戸で授業の準備をする女性達の手助けを精力的にして下さっていること、それから新しい建物の献堂式にともなう起る問題の調整を積極的に助けて下さったことを偶然聞き知っております。――略――

N・G・クラーク

資金面での提言と、オルチン師自身からの報告はなかったが、献堂式に向け順調である様子がうかがえる書簡である。「神戸で授業の準備」とは、この年（一八九四年）からオルチン師は、神戸女学院の音楽教師ミス ケント(Miss Kent)が病気のため声楽(唱歌)の授業を嘱託として委託されていたことをあらわしている。^⑪

オルチン師の一八九〇年七月二十六日付N・G・クラーク博士宛書簡では、音楽による伝道事業、音楽教育、娯楽の面で重要性が書かれているが、それ以前の書簡では教育における音楽が学校経営の上からも必須であることが述べられている。オルチン師の一八八七年二月十四日付N・G・クラーク博士宛書簡では「声楽と器楽のないミッシオンスクールでは、生徒は他の学校に行ってしまう」と「声楽」と「器楽」の科目としての重要性を訴え、そしてミス ヴェッター(Miss Vetter)採用の件をも含めて音楽教師のアメリカからの派遣を強く要請している。

一八八七年八月二十日付では「オルガンをどのように演奏するかを知っている女性を望む」と書いている。一八八八年十二月五日付書簡では「あなたがわたしに、こちらが要望する若い女性などいない、またこの事業のための女性を確保することは難しい、と述べたことを思い出します。がここでわたしは今、女学校において大変必要とされていることは、全部でなくてもよいから時間の大部分を器楽の授業に当てられる女性であると述べたいと思います」と器楽の授業の重要性をのべ、一八八九年一月二十三日付書簡では次のように書いている。「ミス ドーデー(Miss Daudshaday)が戻ったことは、大阪に女性が来るまで大阪にミス マクレナン(Miss McLennan)を行かせるという契約を自由にするものだと感じはじめていました。——略——ミス コルビー(Miss Colby)は男子校に行かなくてはならなくなりました。しかも彼女は女学校の器楽の授業を手伝っているのです。私は、わたしたちのステーションのために二人の女性を確保してくださったご努力を大変うれしく思います。またあなたの手の中にこの問題をゆだねることに満足しています」と一時はこの懸案がうまくいったことが報告されている。しかしミス ヴェッター採用の件はかなわなかった。^⑩

オルチン師の音楽の教員派遣要請には彼自身が音楽に携わるに十分な時間がないもどかしさもあったと思われる。「わたしは、ほとんど、または全く説教の旅にでる時間がありません。わたしは学校と教会で、毎週一〇回の声楽の授業を持っています」、「わたしは声楽の授業、バイブルクラスをやめて地方に出かけたいと願っています。しかし、わたしは大阪に住んでいる間はそれをするのができません」(一八八八年十二月五日付書簡)。

ここでオルチン師は「器楽」「声楽」ということばを使っているが、ここまでの書簡では「器楽」と「オルガン」は同じ意味に使用されている。また「声楽」も「讃美歌」と同義である。宣教師オルチンにとって「音楽」とは、「器楽」Ⅱ「オルガン」、「声楽」Ⅱ「讃美歌」のことをあらわしており、しかも教育の現場で重要であると述べてい

る。

さて、音楽の重要性を訴えつづけたオルチン師は来日してから、伝道、教育の現場からどのような書簡を送っていたのであろうか。まず、来日したジョージ・オルチン師の第一報を見てみよう。

大阪 日本

一八八二年十一月十四日

クラーク博士

わたしは喜んであなたに日出ずる国に無事に到着したことをお知らせいたします。日曜日(十二日)の午後五時に私たちは神戸に上陸しました。——略——わたしはミス・ギューリック(Miss Gulick)にもなわれて日本語の礼拝に行きました。上陸してから二時間後わたしは日本語の讃美歌を歌っていました。わたしは日本語がまったく判らないにもかかわらず、心から歌いました。^⑬——略——

宣教師用ローマ字の讃美歌集が刊行されていたにしても「上陸してから二時間後わたしは日本語の讃美歌を歌っていました。わたしは日本語がまったく判らないにもかかわらず、心から歌いました」とは、その積極性に驚かされる。さて来日約一年後、第二信以降でオルチン師は、「キリスト教(教会)」音楽をどのように伝道会本部に伝えたのであろうか。時系列にしたがって紹介する。

大阪

一八八三年十一月二日

神学博士 N・G・クラーク牧師様

一年前の今日、わたしと妻は神戸に上陸しました。――略――ミス コルビーは、別の仕事をするので女学校での音楽の授業から解放され、喜んでいました。カーティス師(Rev. Curtis)は、わたしたちの教会を改善するのを可能にするでしょうが、彼の衰弱した健康なりの仕事をしています。その仕事は現在ほとんどすべてわたしの上に降り懸かっています。二つの教会は讃美歌の歌唱指導を毎週定期的に受けています。

日本の人に教えやすく、使用するに値する讃美歌のストックは増えていますが、わたしは彼らには今までも歌われ、これからも歌い継がれていくような曲の練習も必要だと時々感じています。わたしは歌のリーダーと見なされる三、四人の人を四つの大阪の教会から選び、リーダーのクラスをつくりました。

このクラスは音楽理論の授業のため週一度、わたしの家に集まります。現在は、そのほか毎週定期的に四つの音楽の授業をしています。わたしが知っている日本語は何と少ないことでしょう。そしてわたしのほんの少しの言葉のストックが使い果たされたとき、クラスにいる英語の判る人に訴えます。時々英語の話せる人がいなくて、それからしばし静かな時があります。

言葉が足りないとき、わたしのジェスチャーはとても表現に富みます。

クリスチャンが音楽に対してみせる熱烈さを見るのは喜ばしいものです。日本の歌の大部分はクリスチャンが使うには不適當です。これらは常に何かの楽器、三味線や琴の伴奏で歌われます。

日本人がクリスチャンになった時、日本の歌は歌われなくなり、三味線や琴もまったく演奏されなくなるでしょう。日本人は失った日本音楽のかわりに、彼らを満たすものとして熱心にキリスト教の讃美歌に向かっています。――略――

一八八四年五月二十六日

神学博士 N・G・クラーク牧師様

—略—

彼らは讃美歌の本を持っていますが、今は、外国の曲を使った日本語の讃美歌のたくさんの選集を持っており、教会のうちの三つはオルガンを持っており、日本の女性が演奏しています。実際、偉大なことはこの変化がとても短期間に起こったということです。

比叡山

一八八四年八月二十三日

神学博士 N・G・クラーク牧師様

—略—

家を離れて山に来る直前に若い日本人が外国の音楽についていくつか質問をしに訪れました。

彼は、岡山の公立の学校と幼稚園の音楽の主任教師の任命を受けていました。日本の方式とともに、彼は外国の楽譜も教えたいと思っています。もしわたしが彼を教えるならば、彼は喜んで岡山から大阪(何マイルも離れています)にやってきてこの都市で四カ月過ごすでしょう。わたしは、彼が去る前に、よりすばらしい方法を彼にも教えるという目的で、少しでも彼を手助けすることに同意しました。

大阪

一八八四年十一月二十五日

神学博士 N・G・クラーク牧師様

—略—

ハバード夫人(Mrs. Hubbard)と妻は、マウントホリヨークセミナリーに同じ時期に在学していました。

わたしはわたしの持つている時間の多くの音楽にささげているとは、あなたにはつきりとはいえませんが、わたしが音楽を教えることが可能で、ほかの誰もまさにわたしのしていることを自由にすることができなかったという事実からすると、わたしのしたことはなんと少しのことだったのでしょうか。わたしは一週間に一度学校で二つのクラスを、一つのクラスを家で、そして四つの教会で週に一度の授業を教えています、ほかの仕事に使う時間がありません。

最初はこれらの授業のための準備の仕事に時間がかかりました。しかし今は、彼らに同じことを教えているために、準備の必要はなくなりました。わたしは今ではわたしの音楽の授業には通訳を使ってはいません。

大阪 日本

一八八五年六月二日

クラーク博士

—略—

この第三の教会の一二人の教会員は、カーティス氏とわたしで二年前に開いた都市の家でかわるがわる説教をして

います。わたしはそれ以来、毎週日曜日の午後ここで讃美歌を歌ったり、聖書のクラスを教えたりして過ごしています。日曜日の朝は、第一の教会と第二の教会に与えられています。これらの三つの教会にいくために、わたしは毎日曜日約七マイル歩いています。第四の教会は毎金曜日の夕方にわたしが訪れています。この教会もまた、周りの村に若い男性を送っています。何年間も教会員を従事させるような十分な仕事があります。大阪は一〇マイル×一五マイルの大きな平野のほぼ真ん中にあります。そしてこの平野の中には一〇〇人から一〇〇〇人ほどの住人がすむ少なくとも四五〇の村があります。わたしたちが山を越えてこの平野をでるとすぐに、二〇〇〇人から一〇〇〇〇人の住人のすむ町が次々に現れます。

これらの書簡から「教会」音楽の方法論が定まっていって行き、着実に「教会」音楽が定着して行く様子がうかがえ、そのことによつて起こる変化にも言及している。

この間に起こった大きな変化として「日本人がクリスチャンになった時、日本の歌は歌われなくなり、三味線や琴もまったく演奏されなくなるでしょう。日本人は失った日本音楽のかわりに、彼らを満たすものとして熱心にキリスト教の讃美歌に向かっています」（一八八三年十一月二日付書簡）と述べている。

また、この間の定まった方法論として「日本の人に教え易く、使用するに値する讃美歌のストックは増えています。が、わたしは彼らには今までも歌われ、これからも歌い継がれていくような曲の練習も必要だと時々感じています。わたしは歌のリーダーと見なされる三、四人の人を四つの大阪の教会から選び、リーダーのクラスをつくりました。このクラスは音楽理論の授業のため週一度、わたしの家に集まります。現在は、そのほか毎週定期的に四つの音楽の授業をしています」（一八八三年十一月二日付書簡）と書いている。

そして着実に「教会」音楽が定着して行く様子として「二つの教会は讃美歌の歌唱指導を毎週定期的に受けています」(一八八三年十一月二日付書簡)、「わたしは一週間に一度学校で二つのクラスを、家で一つのクラスを、そして四つの教会で週に一度教えています」(一八八四年十一月二十五日付書簡)、「毎週日曜日の午後ここで讃美歌を歌ったり、聖書のクラスを教えたりして過ごしていました。日曜日の朝は、第一の教会と第二の教会に与えられています」(一八八五年六月二日付書簡)、「彼らは讃美歌の本を持っていませんでしたが、今は、外国の曲を使った日本語の讃美歌のたくさんさんの選集を持っており、教会のうちの三つはオルガンを持っており、日本の女性が演奏しています。実際、偉大なことはこの変化がとても短期間に起こったということです」(一八八四年五月二十六日付書簡)とオルチン師は述べているのである。

こうして教会を中心に行われた音楽が徐々に定着して行けば、さらに高等機関での本格的な音楽教育とその施設が望まれることになる。それが、オルチン師の一八九〇年七月二十六日付書簡にあらわれる神戸女学院の音楽館建設であつたのである。ちなみに、この音楽館は音楽専用の独立校舎としては日本最初のものでつた。^⑭そしてその意義はあくまでキリスト教を中心としたものでつた。伝道、特に牧師の妻とオルガン、バイブルウーマン、助手、幼稚園の教師、とオルガンとの関係、すなわち「女性」と「音楽(教育)」「女学校」、「女性」と「教会音楽」とが強調されている。さらにこのことを進めると「女学校」における「音楽」科の設置ということになるのである。

「音楽」「女学校(女性と教育)」が宣教師としてのオルチン師のライフワークであつた。彼は生涯にわたつてこのことに心血を注いだ。その実現の一つが神戸女学院の音楽館(一八九四年)であり、その延長線上にあるのが音楽科(一九〇六年)の設置でもあつた。^⑮彼一人の功績でもないし、神戸女学院「音楽科」のスタッフにも加わらなかつたが、こうしたオルチン師の「音楽」と「女学校(女性と教育)」を結び付ける強い願いと行動、そして彼の尽力により教会音

楽が普及したことによって、当時関西唯一の音楽の専門教育機関「音楽科」¹⁶が神戸女学院に設置されたのである。

註

① 幻灯を使った伝道旅行で知られるオルチン師の功績をまとめると、まず著作では日本で初めての本格的オルガン教本である『風琴教授詳説』（須原徳義、一八八一年）やトラクト『はとときす 放蕩息子の話』（警醒社、一九〇〇年）、『世はなさけ The good Samaritan』（警醒社、一九〇〇年）、『The Parables of Jesus and Sermon on the Mount in modern English』（Kyo-Bun-Kwan、一九一四年）の制作で知られている。

日本の讃美歌に果たしたジョージ・オルチン師の功績は、まず明治初期各派独自に出版していた讃美歌集の統一をはかり、そして日本におけるトニック・ソルファ方式の父と呼ばれるように、讃美歌における歌唱の分野に大きく貢献したことである。彼は、二教派（日本基督教会〔長老派・改革派〕と組合教会〔会衆派〕）共通の『新撰讃美歌』（一八八八年、歌詞だけの版）、五教派（組合教会、日本基督教会、メソジスト教会、浸礼教会、基督教会）による『讃美歌』（一九〇三年）、『讃美歌 第二編』（一九〇九年）の編集委員となり、特に音楽の編集を担当した。

また彼は明治初期の讃美歌集をはじめとする讃美歌のコレクション（一五五点）のすべてを神戸女学院図書館に寄贈し、後学の徒に道を開いた。

そして、『日本における讃美歌』（『Hymnology in Japan』）を著した。この『日本における讃美歌』は、一九〇〇年十月、東京で行われた第三回宣教師協議会の席上発表されたもの（『Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries in Japan, Held in Tokyo October 24-31, 1900 (Methodist Publishing House, 1901)』）に収められた。

『日本における讃美歌』の副題は『その過去の歴史、及び統合讃美歌集が実現する可能性について』であり、一、英語讃美歌の起源と、その進展について 二、日本語讃美歌の始まりについて 三、日本語の教会讃美歌の質について 四、日本における将来の讃美歌集と、将来の讃美歌歌唱について 五、統合讃美歌の可能性について 六、標準讃美歌の統一訳について、の六項目で構成されている。

この論文では統合讃美歌の必要性が説かれているが、この論文が発表された同じ年の四月、大阪で開催された福音同盟会で共同で讃美歌集を出版することが満場一致で採択され、統合讃美歌集への気運が一気に高まっていた。そして十月に、ジョージ・オルチン師が東京の宣教師協議会の席で、この「日本における讃美歌」を発表し、この年のうちに五教派による讃美歌委員会が

組織され、三年後の一九〇三年に五教派合同の『讃美歌』が出版されたのである。

この『讃美歌』は版を重ね、改訂が加えられ、昭和六年版、昭和二十九年版、『讃美歌21』と、現在までその基本的な形態を保ちつづけている。

また、『日本における讃美歌』は、日本の讃美歌史を研究する上で貴重なばかりでなく、日本語で西洋音楽を歌うということを考える上でも大変重要な資料である。特に『日本における讃美歌』でジョージ オルチン師が扱った〈日本語で歌う〉ことによつて起こるさまざまな問題は、二〇世紀の間には解決をみていないように思われる。今世紀の課題として再度研究される必要のある資料といえよう。

② New York Times, Saturday, Nov. 22, 1935. "The father of church music in Japan".

③ ここでは「神戸女学院と音楽」に直接関わらない「日本音楽の分析」と「メーソンの再来日の必要性」には触れない。オルチン師の書簡における「日本音楽の分析」と「メーソンの再来日の必要性」に関しては、拙著『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社、一九九九年）第三章、「音楽と宣教」一四〇～一四二、一六〇～一六三頁参照。

④ 『神戸女学院百年史 総説』（神戸女学院、一九七六年。以下『総説』と略す）一二六頁。

⑤ 『めぐみ』第一〇号（一九九四年十二月二十三日）二頁。西尾光子・寺西裕加恵訳「ブラウン書簡―訳および註⑩」『学院史料』第一六号（神戸女学院史料室、一九九八年）九、二〇頁。

⑥ 『総説』一二六頁。オルチン書簡一九〇三年六月二十五日付、一九〇七年六月五日付、一九〇七年九月十二日付、一九〇九年四月六日付。

⑦ オルチン書簡一九〇三年七月二日付、一九〇三年七月二十五日付、一九〇七年七月五日付、一九〇七年九月十二日付、一九〇九年四月六日付。

⑧ 書簡の宛名の部分は以下、地名、日付、名前の順に統一した。「Dear Sir」は「拝啓」とした。

⑨ 校名を「神戸女学院」と改称するのは一八九四年三月二十八日。『総説』四七四頁。『神戸女学院の一二五年』（神戸女学院、二〇〇〇年。以下『一二五年』と略す）三五頁。

⑩ Woman's Board of Missions of the Interior の略語、シカゴに本部を持つ中部婦人伝道会。

⑪ 註⑤

⑫ ミス ヴェッター採用の件の書簡は次のとおりである。

わたしたちのステーションはノイス氏(Mr. Noyes)の妹であるミス ノイス(Miss Noyes)に、日本における活動のために彼女自身をささげてほしい旨の手紙を書いています。しかし、彼女は十分に教育された音楽家であるので、わたしたちの既にある学校の一つに音楽教育担当としていくべきです。もし、ミス ヴェッターがミス ドーデーとともに残らないならば、わたしたちは彼女に大阪に行つてほしいのです。私は、ミス ヴェッターがわたしたちに大変な満足を与えていることを、喜びを持って報告いたします。ミス ドーデーは彼女の来日をことのほか喜んでいますが、そしてわたしたちはどんなことがあつても、彼女が働きやすいように最善を尽くしています。

もちろん過去のことを考えれば、わたしたちはミス ヴェッターが残つてくれることが確実だとはまだ思つてはいませんし、正式にその職に就いてくれる女性についても確実だとは思つていません。しかし、わたしたちのすべてが彼女のことをどんなに喜んでいるか、彼女がいまどんなにかすばらしいことをしているかを彼女に述べるのは、当然のことです。多分、わたしたちの音楽教師に対する要求は、この四年間繰り返されていたのですが、ついに応えがまいりました。わたしたちは、そうなることを望んでいます。私は、本当にわたしたちの男子校のことを気にかけています。去年は、二〇〇人という数を報告しましたが、今年はずつと一三〇だけです。外国人教師が充分確保されていないことが、学生数に反映されています。ミス コルビーは、ずっと務めてくれる教師が確保されるまで学校を離れないという確約を、自分をおさえていつてくれました。この約束は、ほかの方法を採つてもこの学校を離れてしまいたいと思う人々を引き留めるでしょう。(一八八九年五月八日付オルチン書簡)

一八八九年十一月十四日付オルチン書簡では「ミス ヴェッターよりオルガンを教えるに相応しい女性教師はミッシェンにはいない」と報告している。一八九〇年四月二十五日付書簡ではそのミス ヴェッターを評して「彼女の能力とは器楽のためのものである」と述べている。また同じ一八九〇年四月二十五日付書簡では「あなたは、ミス ヴェッターが中国から日本に来る前に大阪ステーションが数年間にわたつて音楽教師の要請を行つていたことを覚えておいでしよう。アメリカから音楽教師を確保できるかもしれないという淡い期待がありました。日本で音楽教師を捜していたのです」とオルチン師はミス ヴェッターの日本での採用を希望していたが、伝道会本部からは財源不足であるという書簡が届いた。

親愛なるオルチン氏

あなたの七月二十六日付の手紙は、手元にあります。

私はあなたの簡条書きにされた様々な項目に対する意見に注目しています。たとえば、音楽教師、またはミス ヴェッターの位置を占める音楽教師に対する六〇〇ドルです。ミス ヴェッターに関しては、私は昨日再び、彼女が神への奉仕を続けるようミッションに働きかけるとともに、全力を傾け、強い願いを込めてこの件を申し述べました。委員会は、前述の事項に関してはこれ以上何らかの行動を起こすことは最善ではないと考えました。私は、この結果を大変残念に思いますが、その事実をありのまま報告します。委員会の中で、ミス ヴェッターに関しては、私が喜びを持って伝え聴いていた援助金とその財源を欠いていると、われわれは聞かされました。――略――(一八九〇年七月二十日付 N・G・クラーク書簡)

⑬ 日本語がまったく判らないオルチン師はいったいどのように日本語の讃美歌を歌ったのであろうか。上記の書簡の他の部分で、彼を歓迎した人の一人としてアメリカン・ボード宣教師カーティス師(一八四五―一九一三)の名も登場する。このカーティス師によってこの年(一八八二年)の三月、日本で最初の本格的讃美歌集『讃美歌并楽譜』が刊行され、同年宣教師用のローマ字版『SAMBIKA SONGS OF PRAISE』も刊行された。おそらこの『SAMBIKA SONGS OF PRAISE』収録の讃美歌をオルチン師は歌ったのであろう。また、同じカーチス師による一八七九年刊行『さんびのうた』のローマ字版『SANBI NO UTA』も既に刊行されていた。この『SANBI NO UTA』収録の讃美歌を歌った可能性も考えられる。

⑭ 『総説』八九頁。

⑮ 音楽館が建築された一八九四年、「音楽(器楽)」の嘱託講師に就任したミス タレー(Miss Elizabeth Torrey)は、一八九六年専任教員となり、一九〇六年の音楽専攻の学科設置に尽力した。前出『めぐみ』第二一〇号二二頁。『総説』二二二頁。『一二五年』三八頁。

⑯ 『総説』二二二頁。

(国際基督教大学キリスト教と文化研究所非常勤研究員)